

はじめに

この本は、社会福祉に関心のある方々、特に若い人たちに、その学びの奥の深さを伝えつつ、勇気とパワーを提供したいとの思いで書かれた社会福祉学の入門書です。これから社会福祉（学）を学びたいと考えている方々はもちろんのこと、社会福祉（学）を主専攻としない学生や多くの市民に読んでもらうことを想定しています。

誤解を恐れずにいえば、既存の社会福祉学のテキストの多くは、専門職養成という縛りのなかで、現代社会をなんとか生き抜いている人々の「リアリティ」をとらえることを後回しにしているように見えます。そうした「リアリティ」の担い手としては、貧困、不安定就労、失業、搾取、孤立、排除、暴力、格差といった事態を経験している人々などが挙げられるでしょう。それは、多重のリスクを背負うことによる、脆弱性と「生きづらさ」に直面している人々にとっての「現実」ともいえるでしょう。

これまで筆者たちは、多くの学生と接してきましたが、社会福祉を学ぼうとする若者のなかには、そうした「生きづらさ」を抱えている人が決して少なくないと実感しています。現代社会では多くの若者がいじめやひきこもりを経験し、うつや不眠、低所得や失業の不安と向き合いながら生きています。また、家族からの暴力、援助交際、リストラット、社会的に割り当てられた性別への違和感や不適合などを経験する友人や家族が周囲にいたり、自分自身がそうであったりする人もいます。

しかし、社会福祉学の標準的なテキストは、そのようなリアリティに向き合うことのない高みから「問題」を構成し、「生きづらさ」を抱える当事者の視点からかけ離れた議論を展開しているように見えてしまうところがあります。それは、社会福祉学が支援者のための学としての性格を強くもってきたからだと考えられます。そこで提示される論点や課題は、「障害者福祉」や「高齢者福祉」といった半世紀変わらない「上目線」の枠組みのなかで語られるのが定番です。そのことがますます社会福祉学を当事者が抱くリアリティから遠ざけてしまうことが危惧されます。上述のように、いまこの「リアル」として家

族からの暴力や精神疾患を経験する友人あるいは自分がいるのに、社会福祉(学)のテキストでは、自分たちの「問題」が遠くにある「対象」として扱われているように映りやすいのです。自身が経験するリアリティと社会福祉学の見方や語り方との間に、そうした大きなズレや違和感を抱える人々がさらに増えてしまうことを、私たち筆者は憂慮しています。

この本は、そうしたズレや違和感を受けとめ、「生きづらさ」を抱える人々の視点および彼らに届く言葉によって、社会福祉の現在を描き出そうと努めています。そうした人々が経験する〈生〉のリアルをとらえることから出発し、それに立ち向かいチャレンジする際のヒントとなる視点と言葉、そして知恵を提供しようと試みています。「生きづらさ」というリアルに直面していたとしても、あるいは、そうであるがゆえに、他者や社会に対して何か役に立つことをしたい、責任を果たしたいという思いをもつ人がいます。そのような思いをもつ人たちを応援できればと考えました。

この本のもう1つの特徴は、上記の問題意識をもちながらも「社会福祉学」を強く意識していることにあります。社会福祉学を意識するということは、あくまで社会福祉の現場で厳しい現実と直面して働いている「支援者」たちを意識して書くということだと考えます。先ほどから「当事者」という言葉を使っていますが、この本は「当事者主義」に立脚してソーシャルワーカーや専門職の存在を否定しようとするものではないということを、あらためて強調しておきたいと思います。

「社会福祉学」と冠した時点で、おのずと支援者視点となることを甘受せざるをえないでしょうし、「当事者」をどこか突き放したような論じ方を完全に払拭することは困難でしょう。「生きづらさ」を抱えるのは、いうまでもなくその当事者なのですが、支援者もまた当事者と同じ時代の同じ社会を生きる1人の市民として、そうしたリアリティを構成する「現実」と対峙しているはずです。とりわけ日本のソーシャルワーカーは欧米のそれと同じような権威ある立ち位置にいるわけではありません。日本のソーシャルワーカーの立場は非常に弱く、不安定であり、厳しい環境のなかにいます。その意味で、この本は社会福祉の当事者と支援者との垣根を越え、双方をエンパワーするという目標を掲げています。

「生きづらさ」を抱える人々をエンパワーする学問は、「社会福祉学」だけである必要はありません。むしろ私たち筆者は、「使えるものは何でも使う」という実用主義的なスタンスこそが社会福祉学の特性であって、さまざまな学問領域で生産された知識をカスタマイズしながら、その共有を図っていくべきであると考えます。それゆえに、この本では他の学問領域で語られる議論や視点を数多く紹介し、人々の〈生〉のリアルを議論するのに活用しています。社会福祉にたずさわり、また社会福祉に関心をもつ人々にとって、社会福祉学がさまざまな学問領域への窓口（ポータル）として機能することは重要だと考えます。

この本はこれまでのテキストとは異なる新しい枠組みを設定しました。そしてこの枠組みに沿って、^{はんかつう}半可通の^{そし}誹りを覚悟しつつ、諸学の成果をふんだんに盛り込みました。しかしその結果、読者にこれが「社会福祉」の学びなのか、という戸惑いや疑義を抱かせてしまう部分があるかもしれません。いずれにしても、盛り込んだ成果の内容や意義がうまく伝わらなかったとすれば、それはすべて筆者らの責任です。

筆者らは、構想段階から会合を開いて、基本コンセプトから文章の校正に至るまで議論を重ねてきました。そのプロセスで筆者たち自身が多くのことを学び、相互に刺激を受け、また共感できたことは大きなよろこびでした。構想から完成まで非常に長い年月がかかりましたが、そのすべての過程に根気強くおつきあいいただいた有斐閣書籍編集第2部の堀奈美子さんにこの場を借りて感謝の言葉を申し上げます。

2015年11月

著者一同